

中世浄土宗寺院の研究

——特に敦賀西福寺の成立と外護者——

宇 高 良 哲

西福寺は福井県敦賀市原にある浄土宗寺院であり、鎌倉時代後期から江戸時代にかけての古文書・古記録等を数多く現存していることで著名である。特に西福寺文書は『敦賀郡古文書』（昭和十八年山本元編）の一部として刊行されているが、同文書そのものの研究はあまり進んでいない。管見では佐藤行信氏の「中世寺院の成立過程について」（『大正大学研究』昭和五十二年五月十二号）と、須摩千願文が「美濃立政寺文書について」（『史学雑誌』昭和四十四年六月月号）の中で西福寺氏書を引用されていることを知るくらいである。

西福寺の成立は寺伝によると応安元年（一三六八）八月、後光厳天皇の命により京都浄華院八世敬法に師事した良如によつて開かれたとされている。この縁起の記載を西福寺文書と比較すると必ずしも一致しない。直接西福寺の成立を示唆する最初の文書は応安二年十一月十五日付の藤原重経の寄進状である。これを見ると西福寺は藤原重経から野坂庄櫛河郷原の敷地を寺領として寄進されている。この場所は現在の西福

寺の位置と一致している。藤原重経は櫛河地方一帯に勢力をもつていた地頭で、孫の将経と共に西福寺に多くの土地を寄進、或いは売却をしている（明徳三年二月三日付将経売券・同日付寄進状参照）。重経が敷地を寄進しているので、応安二年十一月に西福寺が存在していたことは事実である。但、寺伝にいう応安元年八月後光厳天皇勅建説の明確な裏付けはない。また西福寺の成立当初の様子は同寺の第三代住持であり、しかも後述する開山良如の有力な外護者あこめの甥でもある（応永六年四月八日付阿古女・浄鎮寄進状参照）浄鎮の応永三十二年十二月十五日付の置文によると、

右此一院興行之志者、当寺開山上人為融通念仏勧進、以一番半錢奉加_二被_レ建_三立西福寺_一畢。

とあり、良如は融通念仏勧進のため、一紙半錢の奉加を募り西福寺を建立している。良如は当初から特定の外護者をもつていたわけではなく、小錢を勧進して寺を建てている。良如は当時二十六歳であり、若き良如にとつて寺の創建は大変な

苦勞であつたことが推察される。初期の西福寺は明確な浄土宗寺院という意識はなく、融通念仏の道場として出発したことがわかる。更に良如と西福寺の関係を考える場合、応永五年四月二十八日付の藤原将経寄進状が大変重要である。これを見ると将経は南山の妙華院が良如上人の開山の地であるからといつて西福寺に寄進している。南山は柳河郷を流れる原川をはさんで西福寺と向い合う南の山である。これを見ると良如は最初、今の西福寺の位置とは異なる南山の山あい以て寺を開いていたことになる。おそらく良如は前述の応永二年十一月に重経に原の敷地を寄進されるまでの南山の妙華院に止住していたのであろう。この妙華院がいつごろ出来たかは明白でないが、少くとも応安年間以前に良如はこの地に融通念仏の道場を建立しようとして在地の人々に熱心に布教活動を行つていたものと思われる。なぜ良如が柳河の地を選んだかは明確ではないが、彼は越前武生の人と伝記に記されており、郷里と地縁的な関係にあつたのであろう。そして良如はこの地方の人々に広く一紙半銭の奉加を募りながら、人々と深く結びつき、妙華院を建立し、それを基盤として更に西福寺へと発展させていつたものであろう。

このように考えてみると、西福寺は応安二年十一月に柳河郷の地頭藤原重経に原の敷地を寄進され、山あいから平地に進出したようである。そのため西福寺自体の成立ということ

になると応安二年十一月が妥当であるが、同等の前身妙華院や開山僧良如はそれ以前から在地の人々と交流をもつていた。妙華院や西福寺の建立は良如の熱心な布教活動の成果であり、外護者のところで後述するか、西福寺は一時に完成したのではなく、数多くの在地の名主階層に支持され、長い時間をかけながら次第に整備されていつたのであろう。

次に外護者の問題であるが、一応、寺伝や文書に表われた表面的な外護者は、前述の如く最初に寺領を寄進した在地の地頭藤原重経・将経ということになる。そして先学もこれを肯定している。確かに彼等が寄進、或いは売却した田地は五町歩に及び、その外にも山林・家屋敷などもあり、その所領はかなりなものになる。彼等は柳河郷の地頭として勢力をもつていた。そのため西福寺が寺領や敷地を拡張するのに彼等の力が必要であつたことは事実である。但、西福寺文書を細かく分析してみると彼等が最初から西福寺のために全面的に協力したとは思われない。応永二年二月三日付の将経の寄進状を見ると、将経は西福寺に祖父重経と全く同じ場所を寄進している。これは実質的には寄進ではなく安堵であらう。しかも同日付の将経売券には、

右当郷者当加重代相伝之地也。依之件敷地山林田畠等祖父重経為現当之所願成就、限「永代所奉」寄進西福寺也。而間將経以「三寧之儀」、重而進「寄附状」之処、為「末代堅固」料足百貫文渡

給之間副進売券一者也。

とあり、將経は重経が寄進し、自分も寄進したことを認めながら、一方では同所を宋代堅固料として錢百貫文で西福寺に売却している。これは中世の土地証文によく見られる売寄進といわれるものである。詳細は前述の須摩氏の論文に譲るが、私は將経の場合実質的には金をとつてこの土地を売却しているものと思う。このことは更に応永六年四月八日付の良如の置文からも裏付けられる。同置文には、

右田者藤原重経重代相伝之私領也、而阿古女依有懇志、廻種々計略、為酒肴等令沙汰、尽莫大之財力、取出彼寄進狀、被施入于西福寺畢。

とあり、あこめは原の田地四反を西福寺に寄進するため、領主將経に酒肴料という名目で私財二十貫文をなげ出し彼から寄進状をもらい、それを西福寺に納めている。これも実質的にはあこめが將経からこの田地を買い、形式的に寄進ということにしたのであろう。なぜあこめはこのような複雑な手続きをとつたのであろうか。これは前述の売寄進の問題とも関連するのであるが、当時流行していた徳政令や悔返しに対する巧妙な対応策であろう。当時の社会では一度寄進された土地が悔返されてその知行権を失うことがよくある。また売券や質券は徳政令の発布によつて効力を失う。そこで寄進状と売券を兼備することによつて、どちらからも安全に所領を確

保しようとした。この場合もあこめは原の田地を買つたにもかかわらず、寄進という形をとるために更に將経に働きかけたものであろう。在地の地頭として櫛河地方に勢力をもつ將経の寄進状を得ることは同地の知行権をより確実なものにする保証であつた。そのためあこめは將経に私財をなげうち彼の寄進状を得て西福寺に渡すのである。この原の田地四反は西福寺の門前であり、寺領を拡張していく上で起点となつた場所である。またあこめは原の田地四反を寺に寄進する際、自分が尽力して寺領にした田であるから、存命中はあこめが知行し、死後は寺に施入し、あこめ並に兄弟彦三郎の菩提の靈供用にあて、甥浄鎮存命中はその内一反を知行させ、浄鎮没後は全て寺に返すことを良如との間で約束している（応永六年四月八日付あこめ・浄鎮寄進状同日付良如置文・四月十日付良如書状）。西福寺文書中の良如の置文をみると、寄進者に一期の間その土地の知行を任せている例がよくみられる。例えば明徳五年（一二九四）二月三日付の良如置文をみると鐘楼の南の浄円作田も、良如は尼顯性と浄鎮に一期の間知行を任せている。これはこの土地の安堵料五貫文を彼等が出してくれた恩にこたえたものである。また応永十二年六月五日付の良如置文をみると、浄鎮が一期の間知行を任されていた田地は四カ所、計一町二反余に及ぶ。良如はこれらの田地を浄鎮が忠節之功があつたから知行させるといつているが、具体的には前述のような金銭的な援助を指すのである

う。特に浄鎮は開山良如、二代良信の跡を継いで西福寺の第三代住職になった僧である。前二者が京都の本寺浄華院で修学しているのに対して、彼は地元西福寺で良如の許で修学している。彼は西福寺と法系ばかりでなく生活基盤の上でも密着している人物であり注目を要する。

それはともかく、このようにあこめ・顕性・浄鎮、更に道通・浄善等は直接西福寺と結びついており、初期の西福寺の発展は彼等の協力がなくてはありえなかつたと思う。更に注目を要することは、文書中より散見する彼等の關係を整理してみると、あこめを中心に全て一族として血縁關係にあることがわかる（明徳五年二月三日付良如置文・応永三年二月三日付良如置文・応永六年四月八日付良如置文）。このような背景の中で浄鎮が第三代住職となっており、初期の西福寺は彼等一族の菩提寺的な色彩すら感じられる。しからば彼等は當時の社会においていかなる階層に属する人々であつたであろうか。彼等は作職（（応永三年二月三日付良如置文））や名主職を持つており、当主道通が原彦三郎（（付將経寄進状）（応永七年二月九日補任状））と名乗っていることなどからみて、この櫛河の原のあたりの比較的経済的余裕のある在地の中小名主階層の人々と考えられる。彼等は顕性・浄善・道通といった沙弥号をもつており、西福寺に深い帰依を寄せていた。良如が一紙半銭の奉加を募り融通念仏の道場を開こうとしたとき、まず結びつきやすかつたのは彼等のような在地の人々であろう。良如が

當時の社会において勢力を抬頭しつつあつた在地の中小名主層の人々の心をとらえたところに西福寺の発展がある。彼等のもつ力は誠に小さいものであつたかもしれない。しかし彼等が必死になつて西福寺のために働く努力は大きい。前述の藤原重経や將経などの力に比較したら、誠に微々たるものではあるが、彼等が西福寺のために尽した地道な努力こそ混乱する世相の中で寺を大きく発展させる基盤となつたものである。重経や將経が西福寺に寄進や売却した土地はかなりの量である。これが寺の経済基盤を確立するのに重要な役割りを果たしたことは事実である。しかしこれらの土地の多くは前述のようにあこめや浄鎮の仲介を経て西福寺に入つたものと思われる。おそらく在地の人々の熱心な働きかけが地頭である藤原重経や將経をして西福寺に土地を寄進・売却・安堵させたものであろう。西福寺の発展はこのような在地の人々との結合の中にあつたといえる。とすれば西福寺の場合、外護者は一見、寺領を寄進・安堵している藤原重経や將経のように見えるが、実質的な真の外護者はこれらの在地の中小名主階層の人々に求めるべきではないかと私は思う。

従来、浄土宗寺院と名主階層との結びきはあまり問題にされてないが、三河の大樹寺の場合も、室町中期の成立当初は名主階層を基盤としており、今後この方面も注意してみる必要があろう。